

# 中学校英語教科書における異文化理解に関する研究

## —— 問題解決型アプローチを中心に ——

田辺 尚子<sup>(1)</sup>

本研究は、2021年度から新課程となった中学校英語検定済教科書全6社を調査対象とし、異文化理解としてどのような題材が扱われているかを明らかにすることにより、中学校英語教育における異文化理解が国際理解に繋がっていくものであるかどうかを考察することを目的とする。日本国際理解教育学会（2012）をもとに、題材を「多文化理解」「グローバル社会」「地球的課題」の3つに分類し、比較検討した結果、6社とも「多文化理解」が大半を占め、「グローバル社会」を扱っていたのは2社のみであった。「地球的課題」は国際理解を目指す問題解決型アプローチのための題材であるが、全社が扱っていたことから、中学校英語教育において異文化理解が国際理解に繋がっていることがわかった。しかしながら「地球的課題」の内容である人権、環境、平和、開発の4つすべてを扱っていたのは2社のみであり、また、3年生に偏る傾向があるという課題も明らかとなった。

キーワード：異文化理解、中学校英語教育、教科書分析、問題解決型アプローチ

### 1. 研究の背景と先行研究

2021年度に中学校学習指導要領（文部科学省、2017b）が全面実施され、前年度に実施された小学校中学年からの外国語活動と高学年での教科外国語を受けて、中学校英語教育の内容も高度化されることとなった。具体的には、授業時数（週4コマ）は変わらないが、取扱う語彙数が1200語から1600～1800語に大幅に増加し、新たな文法項目として、現在完了進行形、原形不定詞、仮定法、直接目的語に節を取る第4文型が追加された。また、高等学校と同様に、授業は英語で行うことを基本とすることとなった。新課程の検定済教科書（以下、教科書）は全6社とも大判となり、ページ数も増え、質と量の両方において大幅にレベルアップしたと言える。

英語教育で扱う内容には異文化理解も含まれるが、小学校、中学校、高等学校のそれぞれの新学習指導要領外国語科における記載事項はほぼ同じである。すなわち、「3 指導計画の作成と内容の取扱い」の「(3)

教材について」の記述の中で、取り上げる「題材について、次の観点に配慮すること」とある。

ア 多様な考え方に対する理解を深めさせ、公正な判断力を養い豊かな心情を育てるのに役立つこと。

イ 我が国の文化や、英語の背景にある文化に対する関心を高め、理解を深めようとする態度を養うのに役立つこと。

ウ 広い視野から国際理解を深め、国際社会と向き合うことが求められている我が国の一員としての自覚を高めるとともに、国際協調の精神を養うのに役立つこと。

高等学校においてはこれらに次のエが加わる。

エ 人間、社会、自然などについての考えを深めるのに役立つこと。

つまり、異文化理解として取り扱う具体的な内容や取り扱い方、そして、小・中・高における段階的な指導の在り方などは学習指導要領には記載がなく、主な教

<sup>(1)</sup>福山平成大学福祉健康学部こども学科

材である教科書に委ねられていると言ってよいだろう。

ここで、用語の整理をしておくと、上述のウにある「国際理解」という用語は、しばしば「異文化理解」の同意語として使われているが、厳密に言うとその意味するものは異なる。「国際理解」は国家間や民族間の平和教育や開発教育、国際協力などを主眼に置いた相互理解に関して言及する場合に用いられ、「異文化理解」は国際理解の一つの下位区分として、異なる文化背景を持った人間と人間の間での相互理解を主眼に置いて言及されることが多い(塩澤, 2010)。この論に従うと、上述のイは異文化理解を表し、ウは国際理解を表していると言える。本稿が異文化理解の用語を使用しているのは、教職課程コア・カリキュラム(文部科学省, 2017c)において、英語科に関する専門的事項の一つとして異文化理解が挙げられており、教育現場においても一般的に異文化理解の用語が用いられているからである。しかし、この用語のために、英語教育においては異文化理解を扱えばよいのであって、国際理解は求められていないという誤解があってはならず、異文化理解を通して国際理解を深めることが求められていることを忘れてはならない。

この国際理解を推進する教育を従来は「国際理解教育」と呼んでいたが、現在では一般的に「国際教育」と呼んでいる。ユネスコ(国際連合教育科学文化機関)は人類の共通課題を主内容にする「国際教育」を包括的概念として提唱し、多文化理解中心の「国際理解教育」を「国際教育」の下位範疇に位置付けている。また、ユネスコの提唱する国際教育は大きく分けて「文化理解のアプローチ」と「問題解決型アプローチ」があり、前者は人類の多様性を認め、自らのアイデンティティを保持しながら相互理解を深めていくものであり、「国際理解教育」はその中に含まれる(中村, 2010)。一方、問題解決型アプローチは、「人権」、「平和」、「環境」、「開発」など人類が直面している重要な課題を解決していく人間を育成することを目標とするものであり、社会科や道徳や総合的な学習の時間がこのアプローチを基本としている。英語教育においては、コミュニケーション能力や異文化理解を中心とした文化理解のアプローチの立場であるという考え方(塩澤, 2010)もあれば、国際理解のための英語教育という立場から文化理解のアプローチだけでは済まされ

れないという考え方(中村, 2010)もあり、現在においても立場が分かれている。

田辺(2021)は、2020年度から小学校外国語が教科となったことから、外国語活動と外国語において異文化理解がどのように扱われているかについて教科書分析を行った。その結果、外国語活動においては文化理解のアプローチのみであり、外国語においても文化理解のアプローチが大半を占めており、「イタリアと言えばコロッセオとピザ」のようなステレオタイプを提示する表層的な取り上げ方が数多く見られたことを報告している。ただ、1社の教科書(東京書籍, 2020)がマララ・ユスフザイが訴えた発展途上国における教育問題、世界の絶滅危惧種を含む環境問題、世界の食料事情を6年生で取り上げており、問題解決型アプローチが用いられていた。小学校英語教科書全7社のうちこの1社のみが問題解決型アプローチを用いていたことから、中学校英語教科書において単なる異文化理解に留まらず、国際理解を深めていくことができるように問題解決型アプローチが用いられているかどうかを調査することは価値のあることである。新課程での中学校英語が質・量ともにレベルアップしたことと合わせて、異文化理解における理解や思考の深化も図られるべきであり、グローバル化が進展した現代世界に即した国際理解へとつながっていくものになっていることが期待される。

## 2. 研究の目的

本研究は、日本の中学校英語教科書において異文化理解としてどのような題材が扱われているかを明らかにすることにより、中学校英語教育における異文化理解が国際理解に繋がっていくものであるかどうかを考察することを目的とする。そのために、問題解決型アプローチに相当する題材を抽出し、比較検討を行う。

## 3. 対象と方法

### (1) 調査対象教材

2021年度から新課程用教科書として使用されている中学校英語教科書全6社(a～f: 詳細は参考文献を参照)を調査対象とする。なお、筆者は当該教科書の執筆や編集には関与しておらず、利害関係もない。

## (2) 分析方法

調査対象教材のそれぞれについて、異文化理解として扱われている題材を、①多文化社会、②グローバル社会、③地球的課題、の3つのカテゴリーに分類し、表にまとめるとともに比較検討し、考察する。この分類は、日本国際理解教育学会（2012, p. 17）による以下のA～Dの4つの区分のうちの最初の3つであり、（ ）内は主な内容を示す。

A: 多文化社会（文化理解、文化交流、多文化共生）

B: グローバル社会（相互依存、情報化）

C: 地球的課題（人権、環境、平和、開発）

D: 未来への選択（歴史認識、市民意識、参加・協力）  
ただし、A～Cの領域間の区分が難しく、相互浸透が可能であること、DはA～Cを学習する過程でも学習されうるとしていることから、本研究ではDを除くA～Cの3つを用い、A～Cの区別についても、教科書の紙面から判断して授業の中での扱われ方が最も近いと思われる区分に分類することとした。A～Cの3つのカテゴリーと国際教育のアプローチの関係としては、（ ）内に示す主な内容から判断して、多文化社会（文化理解、文化交流、多文化共生）とグローバル社会（相互依存、情報化）が主に文化理解的アプローチに、地球的課題（人権、環境、平和、開発）が問題解決型アプローチに繋がると考えられる。

## 4. 結果と考察

教科書a～fのすべてにおいて、①多文化理解の題材が大半を占めたことから、中学校英語教科書においても文化理解的アプローチが主流であることが明らかになった。小学校英語教科書でよく見られた「イタリアと言えばコロッセオとピザ」のようなステレオタイプを助長するような表層的な取り上げ方も一部には見られたが、英語圏以外の国や地域の多様な文化が取り上げられていた。小学校と同じように取り上げられている場合も、中学校では英語で表現できる範囲が広がるため、登場人物が母国の文化について英語でやり取りすることによって、生きた言葉による異文化理解が促進されることが期待できる。

②グローバル社会は最も取り上げられておらず、aの3年生で「食料や製品の輸入依存」が、bの2年生で「ブラジルの日系移民」が取り上げられていただけだった。現代の私たちの生活が外国との相互依存関係

で成り立っていることは、指摘されて初めて気付くことが多いため、もっと多く取り上げられるべきではないだろうか。

問題解決型アプローチと国際理解に繋がる③地球的課題は、小学校英語教科書では1社のみが取り上げていたが、中学校英語教科書では全社が取り上げており、表に示すように多様な話題が抽出された。しかし、「人権」、「環境」、「平和」、「開発」の4つの内容をすべて扱っているのは2社のみだった。まず、「人権」については、6社のうち半数に相当する3社がキング牧師を取り上げており、中学英語でも理解できる有名なスピーチである”I have a dream.”を活用することもあって定番の題材となっていると言える。その他にも、マンデラ、ダライ・ラマ、マザーテレサなどの世界的に著名な偉人を取り上げる傾向が見られた。次に、「環境」については、1社を除く5社が取り上げており、題材としては、ごみ問題（3社）、絶滅危惧種（2社）、再生可能エネルギー（2社）、地球温暖化（1社）、水問題（1社）、セヴァン（1社）であった。次に、「平和」については、全6社が取り上げており、その中でも5社が共通して取り上げている広島平和記念公園は原爆関連の題材として定番となっていると言ってよいだろう。生徒目線で戦争の恐ろしさを感じ取れるように、貞子と折り鶴の話を紹介することも中学校でこの話題がよく取り上げられる一因であると考えられる。また、語り部やオバマ大統領の広島訪問という新しい情報を追加し、過去の出来事を現代に繋いでいく工夫も見られた。最後の「開発」については、6社のうち半数に相当する3社しか扱っておらず、関心の低さが見られた。このうち2社で共通して取り上げられていた題材は、「世界がもし100人の村だったら」である。これは先進国と開発途上国の様々な格差の実態を端的に把握するためには効果的な題材である。しかしながら、その格差を解消するためにどのような取り組みが必要で、実際に取組まれているかまでは示していない。この2社は、他の箇所において日本のNGOや個人がこの課題に取り組んでいる実例を取り上げるといった工夫をしており、この分野に関しての造詣の深さが窺えた。

なお、表中では学年を丸数字で示しているが、ほとんどが3年生であり、1、2年生での扱いは非常に少なかった。生徒の発達段階と学習段階を考慮すると、

③「地球的課題」は3年生で取り上げるのが最も適切であるとの判断がなされたのかもしれない。

## 5. 結論

本研究により、新課程の中学校英語教科書全6社において、文化理解的アプローチだけでなく、問題解決型アプローチの視点からも異文化理解の題材が設定されていることが明らかとなった。同時に、定番としてよく取り上げられる題材や配置学年の傾向があることもわかった。教科書によっては取り上げていない内容があったり、扱う題材数の差もあったりしたが、どの教科書も英語学習を通して地球的課題について考える

機会を提供していることが重要である。しかしながら、2030年に向けてSDGsの取組みが加速されつつある世界情勢を鑑みると、現状で十分であるとは言いがたい。「地球的課題」は主に2、3年生で扱われているが、今後は1年生から段階的に取り上げ、「人権」「環境」「平和」「開発」のすべての内容をバランスよく扱うことが求められる。

さらに、日本国際理解教育学会（2012）によると、「多文化社会」「グローバル社会」「地球的課題」の題材を学習する過程で、生徒一人一人が地球市民としての自覚をもち、どのように行動すべきかを選択することができる「未来への選択」に至ることが最も重要な

表. 中学校英語教科書6社における「地球的課題」の題材一覧

教科書	人権	環境	平和	開発
a	③キング牧師(アメリカ)、 ③マンデラ(南アフリカ)、 ③ダライ・ラマ(チベット)	③絶滅危惧種ゴリラ(コンゴ)、 ③再生可能エネルギー(デンマーク)	③ガンディー(インド)	③日本からランドセルの寄付(アフガニスタン)、 日本のNGOからの難民支援(イエメン)、 ③世界がもし100人の村だったら
b	該当なし	③絶滅危惧種、③プラスチックごみ(インドネシア)、 ③セヴェンのスピーチ	③広島平和記念公園ピースボランティアと原爆で亡くなった中学生の日記	②山口絵里子(バングラディシュ)、 ③世界がもし100人の村だったら
c	②スティービーワンダー、 キング牧師(アメリカ)、 マンデラ(南アフリカ)	③海洋のごみベルト	②広島平和記念公園、貞子、 ②杉原千畝(リトアニア)	①世界の果ての通学路(ケニア)、 ③カカオ豆のフェアトレード、 ③マララのスピーチ
d	②UluluとAnangu族(オーストラリア)、 ③キング牧師とローザパークス(アメリカ)、 ③ハゲワシと子どもの写真(スーダン)	②Warka Water Project	③広島平和記念資料館、貞子、 ③クリスマス休戦(フランス)	該当なし
e	③キャサリン・ジョンソン(アメリカ)、 クレイグ(カナダ:児童労働反対運動) ③オードリー・ヘップバーンとユニセフ	①地球温暖化、ごみ分別(シンガポール)、 再生可能エネルギー	③「この世界の片隅に」、 オバマ大統領広島訪問	該当なし
f	③マザーテレサ(インド)	該当なし	③広島平和記念公園、貞子、 語り部、③アンネフランク(ドイツ)	該当なし

【注】丸数字は学年、( )内は該当する国名を示す。

ことである (p. 16)。阿部 (2020) は、「未来への選択」まで総合的に扱ってこそ、国際理解教育の学習が深まるとし、教科書にある言語材料に国際教育の内容を入れた独自のカリキュラムを作成して授業実践した結果を報告している。教師が独自教材を作成して実践するには相当の知識と授業力が必要となるが、教科書に適切な題材が配置されていれば、異文化理解と国際理解についての造詣があまりない教師でも学習指導要領の趣旨に則った授業実践をすることは可能である。そのためにも、教科書には「多文化社会」「グローバル社会」「地球的課題」に関する適切な題材をバランスよく取り上げることが求められ、教師には生徒にそれらの題材を自分のこととして捉えて考えさせ、「未来への選択」へと導く指導力や、生徒同士が協調しながら問題解決に取り組もうとする集団作りの力が必要となるだろう。新課程となり英語運用能力のレベルアップのみに焦点が当てられがちであるが、英語学習を通して国際理解を深め、国際協調の精神を養うという視点を忘れてはならない。

## 参考文献

- 阿部始子. (2020). 「国際理解教育を取り入れた小学校外国語科の授業—児童の学びの広がり」と相互文化的コミュニケーション能力に焦点を当てた実践研究—」『JES Journal』20, 63-83.
- 日本国際理解教育学会, (2012). 『現代国際理解教育事典』pp. 16-17.
- 塩澤正. (2010). 「異文化理解と英語教育」. 塩澤正・吉川寛・石川有香 (編), 『英語教育と文化—異文化間コミュニケーション能力の養成』(pp. 25-42). 大修館書店.
- 田辺尚子. (2021). 「小学校英語教科書における異文化理解の推移に関する研究」『福祉健康科学研究』16, 99-110. 福山平成大学福祉健康学部.
- 東京書籍. (2020). 『NEW HORIZON Elementary English Course 5, 6』
- 中村朋子. (2010). 「国際理解と英語教育」. 塩澤正・吉川寛・石川有香 (編), 『英語教育と文化—異文化間コミュニケーション能力の養成』(pp. 74-81). 大修館書店.
- 文部科学省. (2017a). 『小学校学習指導要領』
- 文部科学省. (2017b). 『中学校学習指導要領』
- 文部科学省. (2017c). 『教職課程コア・カリキュラム』
- 文部科学省. (2018). 『高等学校学習指導要領』

## 調査対象教材 (a～fの順に記載する)

- 東京書籍. (2021). 『NEW HORIZON English Course 1, 2, 3』
- 光村図書. (2021). 『Here We Go ENGLISH COURSE 1, 2, 3』
- 開隆堂. (2021). 『SUNSHINE ENGLISH COURSE 1, 2, 3』
- 三省堂. (2021). 『NEW CROWN English Series 1, 2, 3』
- 教育出版. (2021). 『ONE WORLD ENGLISH COURSE 1, 2, 3』
- 新興出版社啓林館. (2021). 『BLUE SKY English Course 1, 2, 3』

(2021年10月19日受稿, 2021年11月24日受理)

## **A Study on Cross-Cultural Understanding in Junior High School English Textbooks: Focusing on Problem-Solving Approach**

TANABE Naoko<sup>(1)</sup>

The purpose of this study is to examine whether cross-cultural understanding in junior high school English education leads to international understanding by clarifying what kinds of subjects are treated as cross-cultural understanding in six certified junior high school English textbooks for the new course of study. Based on the Japan Society for the Teaching of International Understanding (2012), the subjects were classified into three categories: “Multicultural Understanding,” “Global Society,” and “Global Issues.” As a result of the comparative study, “Multicultural Understanding” was most used by all six textbooks, and “Global Issues” was used by only two textbooks. “Global Issues” is a subject for a problem-solving approach to international understanding, and the fact that it was covered by all six textbooks indicates that cross-cultural understanding leads to international understanding in junior high school English education. However, only two textbooks covered all four content areas of “Global Issues,” namely human rights, environment, peace, and development, and there was a tendency to focus on third graders.

Keywords : cross-cultural understanding, junior high school English education, textbook analysis, problem-solving approach

---

<sup>(1)</sup>Department of Childhood Education, Faculty of Welfare and Health Science, Fukuyama Heisei University